

「ヒリュウ台」高糖系ウンシュウミカンの連年安定生産のための適正な株間と結果数

高糖系ウンシュウミカンには、樹勢が旺盛で隔年結果性が強いこと、せん定や枝梢管理等による安定生産技術が検討されてきたが、未だに隔年結果が十分に解決されていない。そこで、福岡県農業総合試験場では樹の小型化や果実品質向上効果の明らかなわい性台木「ヒリュウ」利用による高糖系ウンシュウミカンの連年安定生産を図るための適正な株間や結果数等を明らかにしたので、その概要を紹介する。

☆ 技術の概要

1. 「ヒリュウ」台を用いると、隔年結果しにくく、単位樹冠容積当たり収量が多くなり、高品質果実を連年安定生産できる(図1)。
2. 「ヒリュウ」台樹の株間を1~1.25mにすると、1.5~2mの場合と比べて果実品質、累積収量に顕著な差はないが、早期に隣接樹と枝が混み合って10年生頃までに縮間伐が必要となる。
3. 「ヒリュウ」台樹で単位樹冠容積当たり結果数を25~30果/m³(葉果比30)程度とすると、翌年の結果数が確保できて連年安定生産が可能となるが、40~50果/m³(葉果比20~15)程度と多くすると翌年の結果数が減少して隔年結果の原因となる(図2)。
4. 「ヒリュウ」台樹で結果開始後の樹冠拡大が劣る場合は、6月下旬~7月中旬頃に樹高の1/3~1/2の範囲に当たる樹冠上部の果実を全摘果して夏枝を発生させ、残った果実は小玉を摘果する程度にすることで、収量を減少させることなく樹高が高くなり、樹冠拡大が図れる。



図1 ヒリュウ台樹の収穫状況

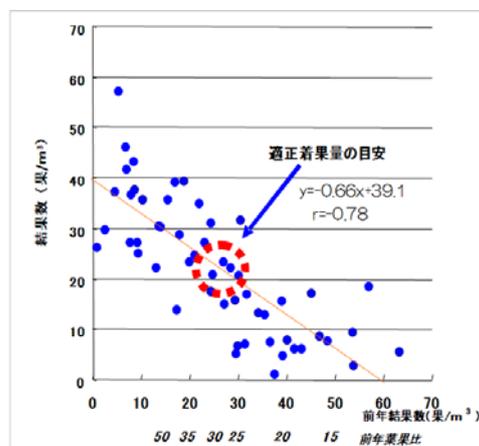


図2 「ヒリュウ」台「青島温州」の結果数が翌年の結果数に及ぼす影響 (H16~19年、8~11年生樹)
注)結果数は樹冠容積当たりの個数で、生理落果終了後に調査

☆ 活用面での留意点

1. 収量確保のため、幼木時は樹高170~180cm、樹冠容積3m³程度になるまで6月下旬~7月中旬に全摘果し、樹冠拡大を図る。
2. 詳細については、福岡県農業総合試験場・果樹部・果樹栽培チーム(電話:092-922-4946、電子メール:nousoushi@pref.fukuoka.lg.jp)にお問合せください。

(農研機構果樹研究所 研究調整役 別所英男)